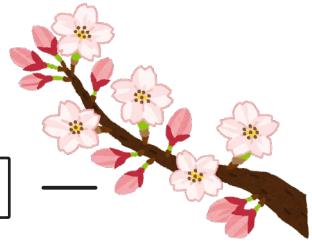




温故知新メディア散歩

都市の祝祭空間 —小野佐和子『江戸の花見』—



著者小野氏出身の千葉大学園芸学部先生方には、植物生態学沼田真先生をはじめとして、著作やレジャー関係委員会でお世話になった。一九九〇年代はバブル崩壊と言われる一方で、イングリッシュガーデンを中心とした園芸ブーム。園芸は数千万人という参加人口を持つ一大ホビー^{*1}。(花咲爺菊之助)

※取材で蘭・バラといった大イベント熱気に圧倒された。人は「花」好き。その代表的祭事が「花見」。

花=桜

昨今、子供に花を描かせるとタンポポやチューリップになるらしい。万葉集は大陸流で梅が多い。秋津島は平安時代から花=桜。和歌・連歌・能といった文芸で、桜が一層スポットライトを浴びる。何故桜かというと、西行法師や伝統が謳われる。うーん。これについては、本欄で紹介した国文学学者山田孝男『櫻史』はその一大精華。

花好きにとって梅・藤・牡丹・萩・朝顔・菊・躑躅と、時代とともに流行があった。江戸末に作られた向島百花園は桜以外の花草木中心。朝顔のような庶民的花の流行。地味な万年青(おもと)がバブルになる。また開国で西洋の大ぶりな花も進出。「侘助」のような小ぶりな花が大柄の西洋椿に取って代わられ、薔薇・向日葵のような大輪が人気を得る。これは明治末からの着物紋様流行によくあらわれている。

<図表1>本書の目次

1 花見の時空

2 花見遊山

3 花見小袖のあふれる花見

4 行列・仮装・滑稽劇



<筑地書館>

花より団子

桃・菜の花・桜草・花海棠と艶やかさでは桜に負けない花も少なくないが、怒涛の桜並木には圧倒される。田畠、山野、城址、公園、川縁、学校、工場に桜は植えられてきた。街道に桜並木を植えることに修羅を燃やすバス運転手。見事な大島桜を移植するのに精魂込める老庭師。映画・テレビで多くの桜ドラマを見てきた。

映像・本だけでなく、姫路城・彦根城をはじめ四月末の函館・青森・米沢・盛岡、段々に咲く吉野山、枝垂れ桜撮影ロケと、仕事柄様々な桜を体験してきた。薄い



桜花びらの撮影方法を名撮影監督や写真家に教示してもらった。どこやらの御奉行さんみたいに、桜舞う花びらの下を歩いたことも忘れられない。

もっともお花見は社会人になってからで、新入社員時代市谷土手の夜桜で風邪をひいた。千鳥ヶ淵、町内会の江戸川橋公園、業界人との哲学堂、上野公園とあるが、どうしても花見は「花より団子」「団子より酒」になりがちで、大碩学山田先生のように文芸綺麗事では済まない。

「長屋の花見」「花見の仇討ち」のような落語のように、本書を読んで物見遊山が花見の本質であることを知り、ちょっと安心した。

一大祭事としての花見

旧暦三月三日・桃節句は現在の四月中旬で、桜開花は農業始めとなる。都市部でも野山遊びや潮干狩りの一つとして位置付けられており、花見もそうした野外レジャーの一つである。

本書は『江戸の花見』と題されているが、本当は「江戸時代の花見」である。

「花見のしたくが芝居見物や寺社参詣と並ぶ…特別な出来事」(15頁)。弁当の支度、晴れ着、念入りの化粧…最大の関心は「翌日の天候にあった」とし、<後生まで言い立てられる花の雨>と諦めきれない川柳を紹介している(7頁)。

「江戸では上野、さらに名所となった飛鳥山、御殿

山、隅田堤も町の周辺に位置していた」(22-23頁要約)。田園風景の広がりと町の閉鎖性を退避させ、郊外の遊覧が人々を自由にさせたとして、<駆け抜けて芝に寝て見る野掛道>とある。

全国津々浦々の花見

本書は掲載図版も楽しく、引用された川柳隨筆も軽妙で愉快。最大の特色は第二章、京・大坂・江戸の三都以外の地方都市・城下町の花見への目配りであろう。高崎、名古屋、三春(有名な枝垂れ桜)、水戸・桜川、徳島郊外北山桜、長崎・日見桜、鹿児島大磯、長岡などが紹介されている。やはり都市郊外、川沿い、見晴らしのいい小高い山が多い。中でも対馬府中での華やかな花見とその衰退が印象的で、「花見の賑わいは都市の繁栄とパラレル」(93頁)としている。

本書は筆者の博士提出論文(1990年、京都大学農学部提出)を一部書き改める形で出版された。

冒頭でJ・ホイジンガ『ホモ・ルーデンス』で遊びの特徴を引用し(10頁)、巻末でM・バフチンのカーニバル論で締め括られている。私も駆け出しレジャー研究員としてJ・ホイジンガやR・カイヨワを振り回していたので、何か微笑ましい。

花見を知る格好の本である。

*1:『レジャー白書2024』(日本生産性本部)によると、園芸の参加人口は2,250万人とかつての3千万より減少しているが、ホビー関連ではダントツに多い。

■著者/ 小野佐和子(おの さわこ)。福岡県生まれ、庭園文化史研究家。千葉大学大学院園芸学研究科修了(造園学専攻)、元千葉大学教授(園芸学部緑地環境学科)。著作は『六義園の庭暮らし』(平凡社)、『こんな公園がほしい』(筑地書館)、他。

■書誌/ 1992年4月10日築地書館刊行、四六版、197頁。